# 太棹

第百三十七號

昭和十六年三月廿八日
第三種郵便物認可

昭和十七年七月廿三日 印刷納本
昭和十七年七月廿五日 發行

（毎月一回 廿五日發行）

太棹（第百三十七號）

本所區向島須崎町九五
御待合　梅よし
電話墨田四七五五番
水島春枝
道順（須崎町電停より半丁先交番前電車通りを左へ入り右へ曲って二軒目）
淺草區雷門二丁目一九
淺草宅　野澤道之助
電話淺草三七九番

風流・金ぷら・茶漬
（美地句）
大日屋
新橋二ノ八
電銀二〇八

貸席
並木倶樂部
淺草・雷門
電話淺草一二三五番

# 杉本花房氏西大關に昇格

# 祝賀義太夫大會

第廿六回東都五十五義會に於て、杉本花房氏は西大關に昇進。（前號記事參照）

寫眞前列向て右より上井筆、和田春和、沼井盛鶴、木下玉松、本杉房花、田中呑笑、澤紘平、鶴澤紘內、竹本國彌太夫、飯田吾鈴、秋本ひばり、小林鶴斗、星桔梗、杉上文盛、藤須米司

後列の諸氏

東都の諸氏

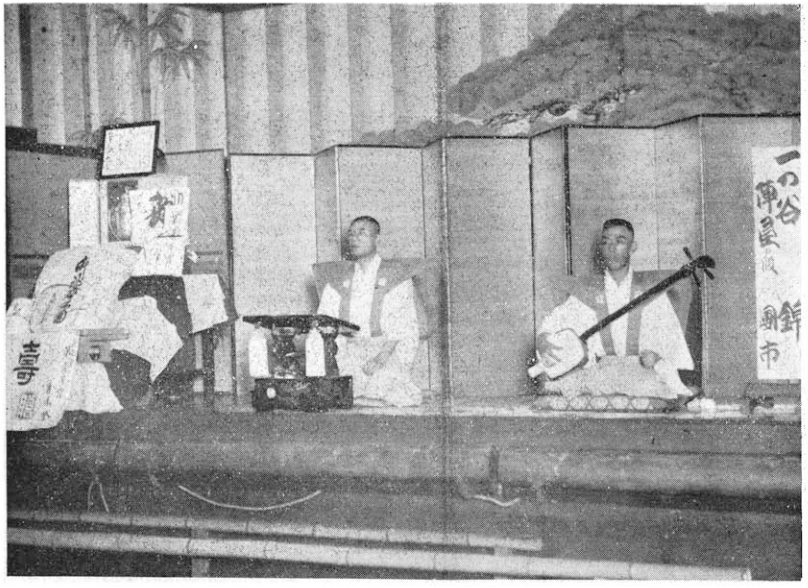
# 齋藤山生氏邸に於ける吉田文五郎

文樂座吉田文五郎は七月の新橋演舞場打あげ後八月上旬大阪劇場に一週間出勤其後は南湯河原齋藤山生氏邸にて八月一杯休養する事になつた。

寫眞は南湯河原齋藤山生氏邸に於ける吉田文五郎。向つて右り桐竹龜松、吉田文五郎夫妻、吉田玉米、桐竹龜雄。前は齋藤山生氏、同夫人。

# 蛭子錦氏文部大臣牌受賞

# 記念義太夫大會




第卅六回東都五十義會にて蛭子錦氏は一等に入賞。（本號記事參照）寫眞は陣屋を語る蛭子錦氏三味線（豐澤團市）

# 信州智識寺觀音詣で

神馬千代吉（里芳女史夫君）　黒川てつ（叶）乾　三千三（桔梗）　本城政次郎（冠之）　麻田たみ（喜らく）　京極康次（辰和加）淺井豊太郎（蝶花）　金子卯之助（勝助）氏等（義太夫會でないから本名を使用）發企となり九十餘人の團体を組織し六月十七日午前八時上野發にて信州上山田智識寺十一面觀世音に參詣、出征將士の武運長久と共に英靈の冥福を祈り、寺にて晝食後上山田温泉に至り清風園に一泊、神馬氏の挨拶ありし後、各自思ひ思ひの藝をつくして十八日朝食後散會した因に大本堂、並びに十一面觀世音は國寶である。

# 太棹 第百三十七號 目次

表紙・カット……齋藤清二郎

口繪 齋藤山生氏邸に於ける桐竹文五郎・杉本花房氏大關昇進祝賀會・蛭子錦氏文部大臣牌受賞祝賀會・智識寺觀音詣で


淨瑠璃本……西村游史（二）
太棹ある記……伊藤紅二（七）
南部太夫を訪ねた話……島東吉（一三）
義太夫獨習……杉山田庭（一四）
奥湯河原にて……德永靜翠（一六）
東會小記……內田三千三（一九）
會報と消息……（二〇）
太棹社彙報……（二三）
編輯後記……芳河士記

# 淨瑠璃本

西村游史

## 一、種類

淨瑠璃本には院本卽ち丸本と稽古本とがある。院本は劇の筋書、脚本のことである。

大言海に「院本とは芝居狂言の筋を書きたる書脚本、又淨瑠璃本なり」と又「丸本とは淨瑠璃の全篇揃ひたる本のこと」とある。

丸本は劇の初めより結末迄脚色した筋で、全篇纏つたものである、昔は淨瑠璃を聞きに行く時には此丸本を持參したものだそうな、劇の全部を知るには是非共その丸本を調べねば分らない、その中に各段がある。

その各段を一冊づゝ取纏めて稽古本とし又演出の時に之を用ふる。但し一段とはいふものゝ、その一段中に口、中、切があり切の中にも口があり奥がある、例へば二段目の中とか三段目の切の奥四段目の切の奥といふ樣に一冊に纏める樣にしてある。演出の時には丸本は使へない、丸本の文字は普通では一寸讀み難い、時代によつてその書振りが違ふ、朱章の入れ方も違ふ、古い丸本となると十行十一行のものがあつて一行の字數三十七八字から四十四五位のものもある、又中には殆んど假名計りのものがあつてトテモ讀めない、意味が分らない、例へば源平布引瀧の古いのは次の樣な殆んど假名計りである。

「だんきやうのふしんしんそうのせいげうをさまたげ。ほうかのやうきうのやくにあたり。一ツてうぎよをうしなふてせいみんとたんにおつとは。今ときよ七十七代ごしらかはゐんのぎよう。しやくびやくのはたひるがへり。しやうこのひゞくおほうち山」とあるが、此の假名書きでは何の事か意味が分らない、そこで後の版には漢字交りで次の通りとなつて

居るのを見ると、はつきり分る。

「檀强の不臣、神宗の盛業を妨。邦家陽九の厄に當。一朝馭を失ふて生民塗炭に墮とは今此時代七十七代後白河院の御字。赤白の簇飈。鐘鼓の響。大内山」とある。

普通の丸本は一頁七行三十字から三十四五字、稽古用又は演出用とする譯には行かない。

稽古用及び演出用の書物は所謂五行本であるが、之も古いものになると六行本もあつた、併し普通五行本といふ、丸本の中の一段を一冊としたものであるから稽古用として又演出用として居る。

## 二、丸本の研究

所謂五行本は稽古用演出用とするが、丸本中の一段丈のものであつてその筋書は此五行本丈では構想は分らない、そこで丸本の研究が必要となるのである。

演者が出演の場合事件の成行を考へつゝ語ることは勿論出來ないが、之を稽古しその段の由來事件の推移を知るには、全段即ち丸本を頭に入れて置かねば本當の情調は出ない。

淨瑠璃の文句は知らず〳〵の間に暗記して此の疑問も起らない、從つて意識せずに語ることがある、例へば文章の意味は分つて居てもその眞相を知らずに居るのは一局部に捕はれたる證據である、即ち稽古の時に反覆する結果そこに何等の不審を抱かない、淨瑠璃を稽古し之を語るものの常として、その五行本に書いてあることを單なる模倣によつて口ずさび表面は我物となつて流暢に語り得ても、その眞の事情を知らないものがあるのは丸本の研究調査が足らないからである、一二の例を擧げて見ると次の樣なものである。

一、十種香(一)簀作はどんな成り立ちの人であるか、此人がまことの勝頼とは如何なる譯か。

(二)幼君の御身の上に若過やあらんかとは如何なる譯か。

(三)八重垣姫と勝頼との言號はどうして成立つたのか。

(四)勝頼の切腹とは、どの勝頼か。

(五)父御の惡事も露知らず御果なされた御心とは何の事か、

(六)霜月廿日我身代りに相果し勝頼が命日とは、どの勝頼か二人の勝頼がどうして出來たか。

以上は十種香四、五枚の中にも研究せねばならぬ問題である。

二、すしやの段(一)下市、上市、吉野卿等の地理的觀念はあるか。

(二)苦い父親彌左衞門是も疵持つ足の裏とは彌左衞門がどんな疵を持つて居るか、

(三)都で御別れ申してより須磨や屋嶋の軍を案じ一門殘らず討死と聞く悲しさも嵯峨の奥泣いて計り暮せしにとは若葉の内侍の述懐は嵯峨でどうしたのか。

三、熊谷陣屋(一)引立連れて行くといふオクリの意味は如何。
(二)サテ約束じや相模助太刀して夫を討たせとは、相模と藤の方とこんな約束いつしたのか。
(三)六彌太には忠度の陣所へ向へと花に短冊とは義經の命令いつありじか。
(四)その方が大切に育つる娘とは誰の事か。
四、酒の段(一)こそは入相とは何の懸詞か。
(二)小手をゆるめし羽交締で、半兵衛は何故縛られたか。
(三)一人の倅は御尋ね者とは半七の人殺しは、どこでどうしたのか。
(四)同類の庄九郎とは何者か。
五、帶屋の段(一)柳の馬場を押小路はどこにあるか。
(二)遠州の殿様の脇差にどんな間違が起つたのか、その間違の原因は如何。
(二)百兩と五十兩の行方はどうか。
(三)緣組を變改は年端も行かぬアノ子でも若やお前の樂しみとは何の事か。
(四)六角堂へお百度とはどうしたのか。
(五)五六といふ長吉の兄はどんな男か。
六、野崎村の段(一)新版歌祭文とはどんな譯か。
(二)さつきの、やつさもつさとは、どんな事が起つたか。
(三)山家屋への嫁入り約束はどんな譯があつたのか。
(四)御夏清十郎はどんな事か。
七、沼津の段(一)吉原の鍵屋は江戸の吉原でないが、どこにあるか。
(二)私故に騷動起り其の場へ立合手疵を負ひとはどうした譯か。
(三)此印籠はどうやら覺への有模様、澤井股五郎は何故お米が知つて居るのか。
(四)池添孫八とはどんな關係のものか。
(五)十兵衛の人物はどんなであるか、最後はどうしたのか。
以上僅かの例であるが、之等の解釋は丸本研究調査の結果でなければ分らない。殊に凡てのオクリは前後の意を受けて居るのであるから、少くとも前段の事情を知り、前段の後を受けてオクリとなるのであるから、無意味に語れるものでない、深い〳〵意味を有するものである。
淨瑠璃の文章は連續的で現代の科學書の如き句切段落がないのみならず、小題目の如き區分的に總括して居ない。
要するに各段の事件は、その前段或は前々段に伏々線が張つてある、その伏線の急所を押へて行けば全段の構想、事件の成行、且つその結末は如何に成り行くかゞ分るが、一段丈の五行本丈では到底判明するものでない。
本讀みが眼光紙背に徹するとは單なる反覆する事丈では紙

背こ徹しない、全篇の意味を把握して初めてその稽古して居る段が分るのである。故に丸本の調査研究を叫びたいのである。

## 三、舞臺見臺に於ける書物

稽古本は五行本でもよいが演出の時には五行本では危險が伴ふことを述べたい。

一體出演の時は書物は單なる參考とすべきものである、一般の初めより終りまで、本當は暗記でなければならぬ、唯次に語るべき事柄の章句の頭丈でスラ〳〵と糸を手繰る樣に自然に出て來るのでなければならぬ、然るに出演者の中には云はゞ書物の棒讀みに過ぎないものがある、それでは眞の語りは出來ない、人形の活躍（素語りにせよ）情調の發露は本を讀んで居ては聽者を藝術的に引入れる事は不可能である、その語りを聞いて藝中の人となり陶醉せしむる程に達したものが先づ上手の語り手といふべきであらう、棒讀みやら申譯的の語りでは聽者に寧ろ氣の毒である。

語り手が書物に賴り過ぎる事は一大禁物であるが、然らば書物は何でもよいかといふに、參考とするのだから何でもよい筈であるが、そうはいかない、丸本でも五行本でも六行本でもペン書のものでも、書拔き樣の半紙に一寸書いたものでも何でもよい樣なものゝ、そこに大なる意味がある、參考は本當の參考であるが、御粗末な書物は演者の責任を果すことが出來ないことがある、之が爲め見臺の上の書物は選擇せねばならぬ。

マサカ丸本で語るものもないが、タマには半紙に一寸書いて語る人があるが、粗雜な書き方は眼と見臺との距離と視覺との關係上語る速度に狂ひが來る、從つて眼はいつも見臺の上に注がれて居る、眼が見臺の上に落ちた語り方は棒讀みとなる、書物を讀むのは書置とか誓文とか手紙とか文中の文の時である。

五行本の古い薄い紙は危險である、舞臺で失敗するのは、その古い薄い紙の五行本を一枚捲つたと思ふやつが、二三枚も捲つてサアその先が分らなくなつた時には、何とも仕樣のない不始末を來すものである。

眼鏡を懸けて語る如きは絶對に禁物とせねばならぬ、論理的に云へば自信がないから書物に賴る、故に眼鏡をかけて之を讀まんとする、之れ藝に忠實でない證據である、而も老眼鏡、近眼鏡を懸けて語るのは誠に見苦しいものである。

要するに書物に賴り過ぎ、書物を捲ることが故意であつてはならぬ、自然の捲りでなければならぬ、而も右手で一々唾を手指につけて指をなめて繰り捲る語り方は、如何にも語りの價値を半減せしめる、語り方以外に注意すべき作法であると思ふ、宜しく左手で自然の捲りでなければならぬ、相當の

語り手はこんな様式作法迄も注意して居る、五行本も書拔樣のものも見臺に載せる資格を有しないとせば、最も合理的のものは書き本である。

## 四、書き本

書き本（書き本的大形木版ものもある）を臺本として五行本を中に入れて語る人があるが、之も見苦しい。

見臺ではヤハリ書き本が必要である、書き本には仙華がある、西の内がある、現在紙不足の際手に入れる事容易でないが仙華は殆んど六ヶ敷い、先づ西の内で辛抱する外あるまい。

上手な書き本と下手な書き本とは語り工合が非常に違ふ、勿論文字は上手でなければならぬが、字をいふよりも一種の畫である、その畫が如何にも淨瑠璃本らしい書體でなければならぬが、字配りが一番大切である、先づ一行九字か十字の程度で、區切りが成るべく行の終りに來る書き方が、上手な書き本で語りよい。頭文字丈見て下の句は自然に出て來る書き方でなければ、行の中途ばかりに區切りがつく樣な書き方は、書き本の價値がない。

一體淨瑠璃の文章文句は多くは三句七五の調である、二句五五調のもの、三句七七調等があるが、三句七五が多い、詩的韻律は淨瑠璃文句の特色である。

殘る蕾の、花、一つ（七五）
水揚、兼ねし、風情にて（七五）
思案、投首、萎るゝ計（七七）
忠と、義心に、健氣成る（七五）
いとし、可愛の、初孫を（七五）
同じ都も、世に、連れて。（七五）
田舍が、ましの、薄煙。（七五）
四五日は、夜の日もろくに。（七五）
寢られぬまゝの、物案じ。（七五）
名に高き、街道一の、大井川。（五七五）
篠を亂して、降る雨に。（七五）
打交りたる、霹靂（七五）

一行の最終字に區切りの來る樣にするには漢字と假名との組合せがうまくなければ文字の配置配列がうまく行かない、從つて送り假名を省く場合が多くある、送り假名を省いた時には迷ふ事があるから片假名で補充することがある。

盛綱館の段に「生捕ッも孫、捕ッれるも孫、小三郎が手柄したと、煽立る眞ン中へ縛られて引キ出されし」の如く文字の大きさは西の内五行で、九字又は十字詰で、太さは、それに適する樣に書けば、老眼のものでも差支へなく、從つて、眼鏡を用ふる要はない、要するに結論として見臺に載せる淨瑠璃本は上手な字で畫を描き字配りを第一の主眼として、區切りと朱章は朱入りのものに限る、之が視覺と書物との距離文字の大小との關係が多大の關聯を有するものである。

（二六四二年六・六識）

# 太棹ある記

## ――日高川や志度寺――

伊藤紅二

私の今の生活は毎日々々が、あまりにもいそがしくて、そんなにあそびまはるなんて餘裕は一つもないのですが、そこはそれ、持つて生れた道樂の芽が、ヒョンな拍子にふき出して來るのはやむを得ません。

實は六月の終り頃、ほんの小閑をぬすんで義太夫紀行と云はうか、芝居行脚と云はうかと申しましても、自分が語り歩いたとか、演してまはつたと云ふのではありませんで、芝居や義太夫で名を得た名所(?)を、走りばしりに見あるいたと云ふので御座います。

◇

そして、それは、中京から始まるのですが、今日はもつぱら關西だけを御披露して、しかも「刈萱桑門筑紫轢」の石童丸で名を得た高野山や、名人團平によつて、一躍有名になつた「壺坂」やなども歩いたと申さうよりは、いともかたじけなく詣であるいたのではありますけれども、私にとつては特にこの度、印象の深かつた「日高川」と「志度寺」「金比羅様」だけを書かしていただきます。

東京を午後一時三十五分發の急行は大阪行で、比較的たつぷりして、座席の餘裕もとれますし、又食堂車もついてゐるものです、大阪へは其の晩の十時五十分につくのですが、途中でチョット謀叛氣がおきて、米原で下車して、其處で、ゆつくり風呂に入り一泊することにきめました。

宿は、井筒屋と云ふのでしたが、それが驛頭の洋館の中にはさまつて、ひどく大時代的な、純日本風な宿でして、ホテルはおろか旅館とも云ひ度くないほど、古めいたものです。

家の中では流石に電氣はついてゐましたが、その電氣たるや五燭で、何かのまことに古色蒼然としてかさでまるで芝居の面あかりのいりそうなあたりに丁場があるのです。

此處で私はフト、芝居の照明のことを思ひ出したのです、無論、人形も同様ですが、今の芝居の照明はあまりに明る過

ぎます。

又、明る過ぎると云ふよりは實にリアルにすぎる樣な氣がしてなりません。

いやリアルといふよりは、むしろ技術的にすぎてゐるのです。

あまり感心しませんね。

あのほの暗い舞臺を、面あかりでてらされて、ほのかに顏がみられるといふ程度の、あのゆかしさとおちついた氣分は今の芝居や人形の何處の舞臺にもみられません。

大體、歌舞伎や人形芝居で扱ふ狂言のものには皎々と電氣や何かで、光りかゞやかせてやらねばならぬといふ樣なものは一つもない樣に思ひます。

こんな理窟を述べたてれば際限がありませんが、とにかく翌日は、つとめておき出でて大阪から南海電車で紀州は流石に木の國だけあります。

見渡す一面、木の山、また山。

下車したのが、驛名道成寺。

道成寺と云へばもう、所作事で有名な「京鹿子娘道成寺」を思ひ出されるで御座いませうが、淨瑠璃では「日高川入相花王」です。

「花王」を「さくら」とよばしめてゐるなども面白いではありませんか、之は決して「〇〇石鹽」の御提灯を持つてゐるわけではありません。

扨て、御承知の樣に、安珍を追ふ清姫の執心が蛇體となつて、日高川を渡ると云ふ道成寺の傳說を仕組んだ操り人形が寶曆九年二月大阪の竹本座に上演されたのが、そも〳〵の濫觴です。

作者は近松半二、竹田小出雲、竹本三郎兵衞等でしたから無論、面白いものであつたにちがひありません。

今からみれば、まるで荒唐無稽の樣なこの傳說も、當時にしては大阪市中をにぎはしたものでせう。

其處で江戸へやつて來たのは明和七年森田座で岩井半四郎が清姫をつとめて、はじめて、歌舞伎の脚光をあびたものです。

◇

其處で大變、古實めくけれども、後で天保六年六月中村座で「日高川入相花王」の三段目の切を上演した話しを一寸書いてみませう。

「朱雀天皇の御不例によつて、皇弟櫻木親王に御位をおゆづりにならうとするのを、左大臣藤原忠文が邪魔をする。親王、山伏姿の僧安珍と身をやつして偶々眞那古の庄司邸の施行宿に泊り合せて、かねて戀仲の小野孛環姫と會ひ、手を取つて道成寺を指して遁行せんとするを、庄司の娘清姫も安珍に執心して嫉妬の念に堪えず跡を追ひかける。日高川の

渡し場へかゝつたが、船頭は賴まれて渡して呉れぬので、清姫の胸は炎ともえ一念凝つて蛇體となつて河を渡る。尙も追ひかけて道成寺へ來たが、女人禁制とて無態の狂亂、見かねて庄司は娘を刺せば、血汐はほどばしつて鐘にかゝり怪しく鳴動する。と云ふ筋なのです。

ここに船頭が登場して益々面白くなつてゐます。

さうして、日高川の船頭と清姫を歌舞伎に於ても人形ぶりに演ずることがいつのまにか例になつて來たものです。

其處で、河竹默阿彌作の「日高川」が二通りになるわけです。

その一つは、明治二年正月守田座でやりました「戀紀の路日高曙」と、明治七年十月に河原崎座でやりました「道行妬仇浪」とです。

前の方のは二幕三場もので、清姫を田之助、安珍を訥升、庄司が仲藏、小田卷姫—多賀之丞と云ふ配役で、眞名子の庄司の娘、清姫がかつて四條河原で見初めた美男が、はからずも山伏姿の安珍とて庄司邸の施行宿に一泊を乞ふ、安珍は同宿の小田卷姫と手をとつて道行、清姫は嫉妬にたへずに、後追ひかけて日高川を蛇體となつてわたると云ふのです。

人形ぶりは、淨瑠璃「花浪權現道成寺」で竹本清元連中で鐘入りの所作があり、左團次の押戻しはよろしきものであつた由です。

あとのものは竹本常磐津連中の出語りで、清姫を訥升、安珍が國太郎、萬才鶴太夫が團十郎と云ふ奮發ぶりですが、大體筋は同じ樣のものです。

扨で、あまり横道へそれてしまひましたが、私は道成寺の例の謠曲でやかましい六十二段のきざはしを、感得し一歩一歩をふみしめてのぼりました。

其處で、道成寺となるとすぐ樣、六代目のあのをどりを思ひ出してしまふでせうし、又それでなくとも、安珍清姫の例のラブロマンス（と云ふよりは清姫の悲戀と執念）を取あつかつたものだけしか思ひ出しになりますまいが、實はこの道成寺には奇しくも女性にまつはる口碑が三つもありますので殊に、道成寺開創の緣起となつてゐます所の「宮子姫」の長髮譚などは全く芝居にもせまほしいものです。

そしてそれは立派に國寶となる樣なものが十四點もそろつてゐるのですのに、道成寺と云へば誰もが、安珍清姫と早合點するほど、之が人々に膾炙してしまつたのです。

全くおそろしいものです。

然し、其處で私は、この義太夫淨瑠璃が如何に民衆に喰入つてゐるかを大方の人に知らしたい樣な氣がします。

こんなにも人の口の端にのぼり、太棹のもつ魅力として當時の大衆をひきつけ、今日に至つてゐることをおもへば、義太夫がわが國民性を培つた力と云ふものは、あだやおろそか

には考へられません。

◇

之はすつかり脱線しましたが、其處で第二のロマンスは、之こそ道成寺後日ものがたりとでも云ふべきもので御座いまして、安珍清姫の異變があつてから四百年もたつてのことで御座います。

梵鐘再鑄の計畫を十何回もやつたけれども、その度毎に色々な故障が起つて一度も成就しない。

そして、とう〳〵正平十四年（今を距る五百七十五年）に源萬壽丸の寄進で二度目の鐘がやつと出來上つたのですが、其の鐘供養の時に、又また一騒動持ち上ると云ふわけなのです。

例の白柏子の舞にからまるもので、之はあまりにも知れすぎてゐますから省略いたします。

◇

所で「志度寺」と「金比羅様」の方へかけあしになりますが、道成寺をあとに、今度は阪和電車を利用して大阪、大阪から岡山、岡山から宇野、其處で四國の高松との連絡船一時間で、讃岐の國へおし渡つたわけです。

「志度寺」は其處から汽車で一時間位の所です。

其の近所の三本松と云ふ所の中學校長が私の友人で、その兄に會ふ約束もあり、かた〳〵好都合でした。

この前に演舞場へ出開帳の時に、誰かの志度寺をきいてひどく感心しましたので、どうしても其の源流をしらべてみたいと云ふ衝動にかられたのです。

しかも、この「花上野譽の石碑」が戯曲化されたのは歌舞伎と操とどちらが先きであるか、あきらかでないと云ふことをきいてゐますのでなほ更、そんなことにヒントがえられるかと云ふ氣持ちも手つだつたわけです。

〳〵泣くなく立つて行く。跡みおくつて菅の谷は……は忘れられないです。

最後に、

〳〵心ゆるめばがつくりと、嵐にさそふ乳母櫻、はかなかりける——次弟なり、

で三重になるところがたまらなくよいもの。

扨て、其處から又一ツばしり、本家本元の、「金比羅大權現」あの數知れぬ階段も物かは、途中の茶屋でひさぐ甘酒に舌鼓をうつて、一途にのぼりつめたのです。

あの五頭山上の眺望、之はチョット私の筆のよくする所ではありません。

こんな走りばしりの「義太夫ある記」も、この非常時には勿體ないありがたいことでした。

精神修養の一端にもなつた上に、からだも鍛えることが出來たからです。

# 伊藤紅二氏に御注意

山下彌生

太棹特輯第百三十六號記載、伊藤紅二氏の「藝道と時局古靱太夫のことなど」中に、

そもそも先代越路太夫が攝津大掾となつた時にその紋下問題は當然津太夫古靱の上にふりかゝつたものだ、古靱は立派に先輩に之をゆづる態度を示したことは藝界に於ては美談でもあつた。

といふ事が書いてある。當時越路太夫が攝津大掾になつた時分には古靱太夫といふ太夫は居なかつた筈で、別段紋下問題も起らず、攝津大掾が引退する迄紋下であつた。

古靱太夫は慥か明治四十二年四月津葉芽太夫から二代目古靱太夫を相續し、攝津大掾の先代萩御殿で初めて竹の間を語つて居るのであるから紋下問題などゝ時代が違ふ、苟も評論家とか劇評家とかと銘を打たるゝ以上は、少し調べて執筆していたゞかないと、將來大に誤りを傳へる事になりますので御注意申上げます。

# 南部太夫を訪れた話

島　東　吉

赤い小田卷で橋姫を追ふ求女と、白い小田卷で求女を追ふお三輪とで「妹背山婦女庭訓・道行戀の小田卷」が幕になつたので、私達も追ふやうな足取りで南部太夫の樂屋をたづねた。

私達といふ復數の一人は富取芳河士主幹なのである。私が某日、松阪屋ホールの家庭舞踊會（柳壽會主催）の樂屋で長唄「五郎」を踊る花柳左近氏（女流俳人蔦本雅子氏）と話してゐるや、そこへ通りすがつたのが富取芳河士主幹で、それこそ十年振りの計らざる邂逅だつたのである。その歸途久濶を叙する會食中――偶々、俳人で義太夫の俳號を持つ田中美穗、吉田冬葉栗山竹の花氏や、女流俳人の柴野てふ氏の主人筑波氏などの素義について語り、次いで文樂座に及び私が去年の文樂座（新橋演舞場）へ文樂通の內田暮情博士と觀劇したことや、その文樂座が東京で興行するごとに、大阪の金本得三氏（東洋徑大鋼管製造所社長）から南部太夫後援を乞れる手紙の來ることなどを話すと、芳河士主幹が盃を置いて――古靱太夫の櫓下披露興行があるから同行して紹介しやう――といふ運びになり、斯く私達が新橋演舞場の文樂座へ來た次第なのである。

それは今にも一と雨降りさうな、梅雨曇りの蒸し暑い七月三日――卽ち文樂座の三日目の宵なのであつた。樂屋


祈皇軍武運長久

豐竹古靱太夫

竹本大隅太夫

豐竹呂太夫

の入口で伊達太夫とすれちがつた。すると丁寧に會釋されたので、私は好もしくそのうしろ姿に眼をやつた。南部太夫は入浴中だつたので、私達は三味線の鶴澤重造氏と話してゐた。もし女だつたらば豐艶な、そして親切な世話女房ともいふべき鶴澤重造氏だつた。やがて明日るい顏をして南部太夫が現はれた。靜かな、柔かな態度の太夫だつた。私が金本氏の名を云ふと、『金本さんは御上京中でしたが、さつき大阪へお歸りになられました』と名殘お惜しげな表情をしながら、金本氏夫妻から最氣になつてゐることや、金本氏に稽古をしてゐることや、その上達振りなどを話して、ふと、芳河士主幹の扇子の、

底荒れの磯うつ波や夏の月

（佐渡所見・芳河士句）

を眺め、『ほう、立派な句ですなあ』と感嘆するのだつた。

私がすかさず『金本氏も俳句を作られるが、太夫も作るんぢやないですか』と訊けば、

『いえいえ、俳句は駄目です。繪は——すこし描きますが、これも南畫の四君子ぐらゐのところで——やつぱり駄目でござりませうなあ』と、唇と眼とを微笑で崩してしまふのだつた。

この夏は鮮滿へ興行するといふ。私も八月頃渡滿するので、彼地で會合出來れば——と、斯んな話をしてゐたが、何んにしても蒸し暑い。

蒸し暑いけれど、廊下を流れて來る太棹のひゞきが、何んともいはれぬ快い情調であつた。と、次ぎの古靱太夫の「一谷嫩軍記・陣屋の段」の幕開きを知らせる木の音が廻つてゐるので、それと同時に芳河士主幹が「夏の月」の扇子をパチンと閉ざし、これをキツカケに私達は腰をあげたのである。


| 祈皇軍武運長久 | | |
|---|---|---|
| 竹本織太夫 | 竹本南部太夫 | 竹本伊達太夫 |

# 義太夫獨習

杉山田庭

獨習するといふ事は、師匠を取る稽古よりは六ヶ數ものである丈けに、師匠の眞似でなくほんとの自分のものとして、誇るに足る藝術を創造し得らるると信じてゐます、私など所謂貧乏士族の伜で學資などと贅澤な事は言ふて居られず、學業と言つてもホンの小學校のお世話になつた丈けで、やつと學校の先生を勤め家庭の生活に資すると言つた鹽梅、隨つて物心ついてから、ハツカ鼠のやうにアチラコチラと嚙り散らしたものに、碁將棋から玉突庭球水泳の外面的なもの、發句和歌川柳都々逸から新體詩や短篇小說といつた內面的なものはおろか、學究的には書畫と並行して國史を先きに四書五經を後に藝能的には詩吟から尺八明笛三味線へ又樂燒から農產物加工製造更に和洋料理と、それからそれへ進んで逐に隱し藝、藝者遊び……時節柄もう此邊で擱筆しますが、どれもこれも先生に就いた系統的なものでく所謂我流でごまかして行きます、丁度今から三十年程以前大阪は船越町といふ處に、合資會社で大阪文樂社といふものが出來まして其事業に義太夫研究會といふものを造り、機關誌として義太夫獨習新書といふ十卷にて大成する美濃紙五十丁內外の和本裝禎の立派なものを發行致しました。多分太棹續者の中には御承知の方もあらうと思ひますが、此研究會は會員組織で定員一千名を限り一ヶ月會費金貳圓五拾錢でありました。獨習凝りの私は勿論その會員となりました


祈皇軍武運長久

竹本長尾太夫

竹本七五三太夫

竹本雛太夫

が大正九年一月に其第一卷を出し、三月に其第二卷、六月に其第三卷、八月に其第四卷を出しましたが、時利あらずとでも申しませうかあとが續きませんでした。もしも此會が成功してゐましたならば私も今頃は太棹界の立役者となつてゐたかも判りません。殘念な事をいたしました。私の獨習獨學凝りも何一つとして成功したものはありません事を此機會に懺悔いたして置きます。此の義太夫獨習新書の第一卷に當時八十一歳の攝津大掾が序文を書いてゐます。

序

吾れ此としつき幾百番のかたり物に心をつくして妙趣に達せんと翼へども氣と機の異同の然らしむるか語り終りて吾れと我心に滿足せること甚だ鮮し唯三絃は語れる節に合はすものながら其合ふが爲めに語れること往々にして之あり蓋し人の音調には時として變調あれとも彈く三絃の譜に僞りなければ忌むづき語り辯など免るゝことを得べく初學としては正しき三絃に從ふこそ善けれ、今義太夫獨習新書なるものゝ稿本を見るに及んで此點に於て頗る我心を得たり卽ち思ふ所をしるして序となす

大正六年初春　八十二翁　攝津大掾

猶ほ六代目豐澤廣助も

序

今は昔日となりぬ浮瑠璃に節紅葉なる書あり歌三味線に力草なる書ありて共に聲調音譜をつばらにし時の人之れを便とせしも多かりしが物換り星移れば音調にも自づと異同を生じて舊尺のみを則とし難きものあり這たび文樂社にて編纂されし義太夫獨習新書を見るに古きを溫ね新らしきに從ひ三絃を基として聲調をも細かに示したり斯界に遊はんとする人此書に依らば座ながらにして趣味を得るに庶幾からんかと乞はるゝまゝに書して序となす

大正六年初春　七十六翁　豐澤廣助

次號には竹本此太夫の教示といふを書き拔いて太棹讀者に御紹介を致します

## 祈皇軍武運長久

出征中

竹本濱太夫

豐竹司太夫

豐澤廣助

# 奥湯河原にて

徳永靜翠

岸竹史の病氣全快祝を兼ねて、我々一行は奥湯原山翠樓に滯在中にて候、依て同行の豊竹團司師、並に豊澤猿之助師と、十一日夜、同山翠樓演藝場に於て、左記の通り、淨曲公演會を催し申候

一、御祝儀寶の入船　入　登
一、紙　治　絃　徳永靜翠　豊澤猿之助

一、一ノ谷嫩軍記　熊谷陣谷の段　絃　岸竹史　豊澤猿之助

次いで、十二日夜も、左記の通り公演會を催し申候

一、御祝儀寶の入船　入　登
一、攝洲合邦辻　合邦庵室の段　絃　岸竹史　豊澤猿之助
一、近頃河原達引　堀川の段　絃　徳永靜翠　豊澤猿之助

（特別出演）

一、戀娘昔八丈　鈴ヶ森の段　絃　豊竹團司　豊澤猿之助

土曜日より日曜日へ掛けての事とて滯在客も多く、非常に好評を傳し申候殊に團司師は、現在は舞臺を退かれ居りて、容易に聽かれぬ事とて、同宿の聽衆も大喜びにて、語物『鈴ヶ森』は聽衆を魅し申候

元來この鈴ヶ森は、その筋は甚だ單純にて、淨曲の中では輕き語物に屬し女義全盛時代には、娘義太夫の語物として、頗る恰好なるものにて、盛に語られたるものに候へ共、近年は餘り語られざるものにて御座候、併し團司師の妙技は、その單純なる筋合にも拘らず、双親の娘を思ふ情合、偖はお駒の


| 祈皇軍武運長久 | | |
|---|---|---|
| 鶴澤清六 | 鶴澤寛治郎 | 野澤吉五郎 |

述懷等、逐次情を盛り上げ行き、殊に初心の聽衆者に取りては不明瞭の語句多きものに候へ共、團司師の語り口は初心者にも一字一句明瞭に聽き取れて情を主として語られ候點など、洵に敬服致し申候

總じて昔の娘義太夫全盛時代には、所謂女義向の鈴ヶ森の如き、輕きものが多く語られたるものに候へ共、近來の女義は兎角大物のみを狙ひて語る傾向にて候、併し輕きものとても、團司師の咽喉に掛かれば、重々しく相成り候事は、恰も吉住小三郎氏が『宵や待ち』を語れば、一種獨得の重々しき、むつかしき『宵や待ち』と成ると、同樣と存じ候

この鈴ヶ森に就て、或る參考書より拔萃せるもの御參考に供し候

由來、この戀娘昔八丈は、松貫四、吉田角丸の作にて、安永四年九月九日境町の操人形、薩摩座に於て始めて興行されたるものに之有候、その取材は享保年中に江戸新材木町に、白子屋と稱する材木商有之、その主人庄三郎なるもの、病身の爲に商賣不振にて、將に破產致さんとせし時、その娘に『お熊』と云へる美人有之、その美貌を餌に、文四郎と云ふ持參金附の聟を迎へ候が、その時、お熊は既に店の手代忠八、その他の者と私通致し居り、母親も亦强慾者とて、之れを知り居りながら、却て娘を奬勵して、更に又他より持參金附の聟を迎へん爲に、現在の聟文四郎を殺さんとして果さず、遂に之れが裁判沙汰となり、彼の大岡越前守の裁斷となりて、享保十二年十二月二十五日、お熊は鈴ヶ森に於て斬罪梟首と相成り候事蹟より脚色致したるものに有之候、當時江戸には、鈴ヶ森と、千住小塚原との二ヶ所の刑場有之、鈴ヶ森の仕置場所は大森の海岸通り、涙橋と八幡との間に位し、今日も松並木は遺り居り候へ共、現在は砂風呂旅館の所在地として有名に相成居り候、而


祈皇軍武運長久

| | | |
|---|---|---|
| 野澤勝平 | 鶴澤重造 | 野澤吉三郎 |

して、日本橋を境として、之れより以南の重罪者は、この鈴ヶ森にて、また以北の重罪者は、小塚原にて處刑致され候ものにて、今日もこの鈴ヶ森には題目塚なるもの有之候

この淨曲は、全部にて七段より相成り居り候

お熊が處刑致され候際は二十三歳にて、その引廻しの時、上に黄八丈の大格子、下著には白無垢を著し、髪は島田、簿化粧をして誠に美しく、手には水晶の珠數を掛け、馬上に荒縄にて括られ居りし由にて、群衆はその美しさを視るために、二度も三度も駈け廻りしと申す事にて候

斯様に黄八丈を著し居りしために、その名題にも八丈と附したる次第にてこれが爲め、この當時江戸にては、暫く黄八丈を著る者無くなりしと申す事にて候

孰れにしても、その事實はお熊も母親も心よからぬ者に候へ共、淨曲に於てはお熊は殺し得にて、頗る貞節なる女の如く脚色致され居り候

以上の如く、奥湯河原、山翠樓に於

## 護國寺の朝

芳河士

僧一人登り來て夏霞みの夜明け

芙蓉女に逢ふ

言ひ合はせし如き朝にて蟬涼し

其後逢はず

回想暫し石にかけをり閑古鳥

ける二日間の公演會は、頗る好評を博し、今一日、日延べをと申込まれ候程にて、島渡茲に御報告申上候次第に御座候

敬具


祈皇軍武運長久

竹澤園六

桐竹紋十郎

桐竹門造

乙女文樂

# 東會小記

内田三千三

久し振りで、駒若を聽く爲めに東橋亭の木戸をくぐつた。それが殘念にも丁度駒若が下りて素八の「酒屋」が開いた處だつた。素八は藝線が、しつかりしてゐて危氣は無いが、どうも、滲じみ出る味が若い故乏しい。それに、處々熊谷でも飛び出しそうな「剛强」さがあつて、世話物らしい「詩韻」と「哀婉」な情趣に缺け、味の不足を嘆じさせる「酒屋」だつた。

此の人は、輪廓の大きい雄渾な「時代物」を語る人だと思ふ。細かい心韻の交錯や魂の陰影を描き出すには、藝が未だ練り足らぬ。其の反面力一杯ブツかつて行く强靱な膽力と聲量豊富さに育ぐまれてゐるのだから、それを語り物の撰定に依つて發溂と良現させ度い。

## 越駒　津賀昇（小坂部）

若くして駒龍が女義生活を退いた爲め、越駒の合三味線に津賀昇が拔擢された。何時も太夫に隱れて眞摯に彈く津賀昇は、藝を實りにかけない點で好感は持てても、內訌的な地味さが「ふつきれ」ない藝感を是れ迄與へた。その藝の仄暗さを突き破つて情熱が奔出して來たのは一進歩だ。藝質もつつましい潤ひがあつて「小狼幸」を想はせる藝の餘韻を失はずに止昇して欲しい。

越駒は技巧豊富で……淨瑠璃を面白く聽かせる點では女義中屈指の人だが、その良き意味の大衆性が愉しさに低個して、深さへ到達させぬ難を招く時が偶々ある。

其處で「蝶八」も例に依つて稍「技巧の亂舞」がありはせぬかと「杞憂」したが、氣を入れてみつちり熱演した。

殊に「親と親とは」の箇處が優れてゐる、「千萬」……で、悲愁を濃出し「無量」で餘情深く眞魂を滲じませる演出がコクがあつて深い。それと「分けて可愛い松太郎」……に愛情切々と迫る情韻がある。

## 彌周　三生（五郎正宗）

同じ五郎物を演るなら「新薄雪」を出す方がどんなにか有意義か知れぬ。

この一段は、講談の淨曲化を想はせる平板な講成で、節付もゾツとさせる程すぐれた箇處に乏しい、しかし演出は彌周、三生俱に達者で、「平淺」な叙述性から浪曲以上の感動へまでモリ上げる。演目に變化を生み出さうとする彌周の努方は分るが、結極作が凡調の爲め、達者さのみが耳底に殘る。

## 昇登　綱助（鳴門）

綱助の絃は本筋で、折目正しい深韻がある。急所々々を正確に把握するユルミのない鋭さが情感の深奥に群れるが、稍尖鋭過ぎる部分もあつた。昇登は、綱助の整つた絃に全力を打ち込んで力演した。堅實な寫實感を克く現はすが、哀淑とした餘韻がしんみりと、未だ流露しない。形の中に潜む心韻の起伏と陰影が、もう一息望ましい。

# 會報

## 消息

▽**關路氏慰安會**　的野關路氏の病氣全快を祝し、六月卅日の夜東京會館に於て横山雄偉氏應援の下に一夕の慰安義太夫會が催ほされ、實業界有志を招待し六時頃より晩餐會を開き、憲兵隊から應援來聽あり、頗る盛會を極めた。太十(一松、猿平)寺子屋(關路、猿之助)

▽**東京むつみ會**　豊澤和孝連の「むつみ會」は七月十七、八兩夜平塚見番樓上にて開會。(十七日)酒屋(いくま)長局(王華)柳(竹糸)太十(義昌)—(十八日)忠六(榮壽)野崎(竹糸)質店(王華)寺子屋(義昌)絃(和孝、仙壽)

▽**五聲會**　井上聲鳳氏主宰の五聲會は久々にて七月廿二三の兩夜相互倶樂部に於て開催。(初日)鮨屋(松樂、染登)堀川(三芳、猿三郎)野崎(聲鳳、吉作)—二日目—山名屋(松樂、染登)岸姫(三芳、猿三郎)柳(聲鳳、吉作)

▽**文樂人形見學**　七月十七日九段教育會館に於て招聘された桐竹紋十郎は、大谷松竹社長、内海氏等の講演に次いで、梨本妃殿下、荒木大將、松平氏各婦人名門四十餘氏の前で、八重姫の使ひ方を詳述した後竹本雛太夫(絃、友衛門)がさわりを語つた。

▽**義榮會の那須行**　銀座義榮會の諸氏は、七月卅一日八月一日の二日間新那須溫泉「山樂」にて出征遺家族慰安義太夫會を催ほし、非常な好評を博した。三十一日は午後五時より。草履打(紫江)太十(さかえ)寺子屋前(美鳥)陣屋(語松)一日は午後二時より。先代(三奚)酒屋(朝正)赤垣(團壽)寺子屋奥(美鳥)朝顔(さかえ)合邦(語松)紙治(菊泉)絃(猿平)

▽**素澤力彌氏の會**　素人であるから素澤などゝ洒落た蒲田の力彌氏は片岡我當に隨行して久しく大阪で暮してゐた處八月二日暫く振りに歸京したので、西玄綠氏が發企をして六日交正倶樂部で氏の爲めに一夜會を催したが、玄綠(忠四)呂聲(岸姫)の外大阪より貴雀、南糸氏等も出演し、なほ若菅氏は豊澤松榮の絃で阿古屋を語つた。

▽**三好會**　同會は七、八月を休演し九月廿三日相互倶樂部に於て第十三回を開催、柳(滿壽三)十種香(喜三香)太十(津滿子)本下(好樂)辨慶(美昇)壺坂(梅聲)絃(三好、花昇)なは壺坂は人形を入れる豫定の由。

▽**素玄淨曲研究會**　同會の第四拾七回は七、八月合併懇親會として八月廿三日午後一時より木挽町朝日倶樂部に開催。合邦(一司、蟻鳳)紙治(三司、彌玉)新口(其甫、猿藏)近八(津彌太夫、米翁)次いで守隨憲治氏の講演、細川景正、鶴澤絃平氏の研究發表等ありて後十時迄感想發表座談會がある。

▽**淨曲長生會** 第四回を八月廿五日正午より上野松坂屋ホールにて開催先代(山生、鹿重)壺坂(以與子、良造)安達(正鳳、道之助)朝顔(佳津子、綾之助、琴、佳世子)柳(六花、清一)戻橋(愛氷、綾之助)本下(喜鳳、道之助)志渡寺(乃菊、綾之助)

▽**淨聲會** 七月廿日夜相互倶樂部に開催。太十(山生、鹿重)新口(義昇、仙玉)岡崎(乃菊、綾之助)安達(紫蝶、仙玉)

▽**さゝ波會の越後行** 大森「さゝ波會」は越後小出町に遠征、東光、呂聲氏應援出演のもとに七月十五、十六兩日柳生館にて賑々しく開催し兩日共滿員の盛況を呈した。(初日)小磯(伊久子)十種香(秀の家)鮨屋(小政)壺坂(春日)太十(資子)忠六(呂聲)先代(薫)安達(東光)日吉(末吉)小唄ぶり(花子)、掛合、忠七(由良之助、春日。お輕、末吉。平右衛門、薫—二日目—由良湊(伊久子)酒屋(秀の家)新口(小政)鮨屋(春日)先代(資子)寺子屋(呂聲)戀十(薫)合邦(東光)中將姫(末吉)小唄ぶり(花子)掛合、堀川(與次郎、薫、母、末吉。お俊、資子。傳兵衛、春日)絃(雷糸、末吉、薫)

▽**東都女義後援會** 七月廿八日午後四時より並木倶樂部にて第三十回を開催。太十(駒榮、佳世子)梅由(佳世子、綾作)河庄(重子、勝八)草履打(猿春、三生)五斗(團蝶、猿幸)千兩幟(小和光清三)陣屋(佳仙、仙照)堀川(綾之助、清一、ッレ、清二、清三)

▽**女義若女會** 雷門東橋亭にて(七月一日四十九回)玉三(津賀重)鮨屋(素八、播磨一)小磯(小津賀、紋敎)辨慶(素次、素八)吃又(猿春、三生)—七月十五日(五十回)太十(津賀重)白石(素次、素八)伊賀五(彌周、三生)新口(文昇、猿昇)先代(素八、播磨一)

▽**五十義會慰勞會** 東都五十義會々長細川清氏は同會幹部諸氏の慰勞會を八月六、七兩日伊香保溫泉にて催した。

▽**文樂座の八月** 大阪文樂座の八月は休演し左記地方巡業に決定した。呂太夫、吉左、織太夫、團六、南部太夫、重造、伊達太夫、勝平、文太夫、吉三郎、播路太夫、友花、越名太夫、綱延、司太夫、新太郎、呂賀太夫、團作。紋十郎、玉助、玉市、紋太郎、龜松、光之助、玉德、其他廿餘名。此一行は八月一、二、三日博多大博劇場を振出しに渡滿。五、六日(京城府民館)七日(安東劇場)九日(撫順公會堂)十、十一、十二、十三日(新京公會堂)十五日(ハルビン會館)十六日(吉林公會堂)十八日(鞍山中央劇場)十九、廿、廿一日(奉天平安堂)廿二、三日(大連劇場)廿五日(平壤金千代座)廿七、八日(小倉中央劇場)歸阪。出し物は第一回(三人片輪、先代萩、堀川、阿古屋)第二回(春日月、太功記、酒屋、安宅關)——重太夫、廣助、住太夫、寛治郎、長尾太夫、七五三太夫、德若、津

麿太夫、一郎右衛門、田喜太夫等は吉田德三郎人形一座を使つて八月十六日頃より八幡、福島、博多等を八月末まで巡業。――相生太夫、吉五郎、雛太夫、友衛門、津麿太夫、清友、宮太夫一郎右衛門、松島太夫、清廣等は八月六日より大阪劇場に人形入にて出演、出し物は千本道行。人形は靜(文五郎)忠信(榮三)にて 左並びに足遣ひは 門造、政龜、小兵吉、玉勝といふ珍らしい顔觸れ。

▽襲名(文樂座) 野澤勝平師は二代目野澤喜左衛門、野澤吉左師は野澤松之助、野澤勝芳師は野澤勝太郎、鶴澤綱延師は野澤錦糸といづれも十月十一月興行にて襲名又は改名する事になつた。

# 太棹社彙報

本欄は大會又は新生の會を報導致します。開催前月に詳報したものは開催後の記事を略します。特種の催ほしの外前書きを略します。番組御送附なきもの、或は通信なきものは記載洩れとなります。御諒承を乞ふ。掲載順不同。 (太 棹 社)

## 湯淺光玉氏二回大關

## 祝賀義太夫大會

第卅五回東都五十義會にて西大關の地位を獲得した湯淺光玉氏は今回第卅六回同會に於て東大關に昇進したので此の榮譽を記念して七月八日正午より並木倶樂部にて祝賀義太夫大會を催し左記番組に依り頗る盛會を極めた。

本下(本藏、綾作。伴左衛門、佳仙。三千歳姫、佳世子)合邦(乃菊)日吉(喜照)鮨屋前(佳津子)同奥(柳光)沼津(一廣)狐火(愛氷) 陣屋(一昇) 中將姫(淺路)河庄(枝蝶)以上絃(綾之助)新口(六花、清一)太十(龍昇、若千代)朝顔(其角、松四郎)十種香(都竹、都太夫)組打(義昌、綱助)安達(都昇、都太夫)辨慶(呂聲、綾之助)阿古屋(光玉、清一、琴、胡弓、清二、清三、松四郎)掛合、忠七(由良之助、光玉。お輕、都昇。平右衛門、呂聲。綾之助)

## 竹水會

東京に於ける稽古場新橋竹水莊で去る四月廿三日狹心症の爲め急逝した七

代目野澤吉兵衛師を偲ぶ爲め、幸ひ文樂座東上中を機會に素玄一門の人々に依つて「竹水會」が組織され、七月廿四日午後二時より日本橋倶樂部に於て左の番組に依り催された。

殿中（師直、吉五郎。若狹之助、吉季。判官、吉左。絃、辰六）櫻時雨（土佐廣、綱助）以下抽籤。合邦（巴、吉五郎）忠九（操、道之助）忠四（千晴、吉佐）儀作（どくろ、吉五郎）大文字屋（兒雀、吉佐）壺坂（澤市、土佐廣。お里、清子。觀世音、重子。絃、綱助、ッレ紋彌）

## 五十義會文部大臣牌受賞

# 記念義太夫大會

蛭子錦氏は第卅六回東都五十義會に於て、前點一二五點三三より一躍一四二、七五に昇進し一等に入賞、文部大臣牌受賞の榮譽をかち得たので、氏は祝賀を兼ねてその記念義太夫會を團市會並びに德島縣在京素義會後援の下に七月十六日正午より、並木倶樂部に於て賑々しく開催した。氏は豐澤團市師に就き熱心な猛稽古を續け近來目立つて精進して來たものである。當日の番組左の通り。

太十（萬樂、團市）野崎（越廣、歲太夫）壺坂（喜昇）陣屋（壽光）紙治（市菊）忠六（清昇）以上絃（團市）鳴戸（美幸、朝見太夫）佐太村（ほくろ）寺子屋（一）柳（歌雀）安達（越佐）鳴戸（豐）合邦（登龍）新口（潮）以上絃（團市）志渡寺（花光、彌國太夫）沼津（靜壽、團市）辨慶（松濤、紋教）堀川（鯖世花、團市）岸姫（淑登、昇登）鮨屋（千晴、團市）陣屋（錦、團市）

# 墨聲會 生る

久しく續いた向島竹翠會は今回同會を解散して新らたに向島素義人が一丸となつて墨聲會を組織した。島うつぼ高光吳光、黑川叶、山田義昇、京極辰和加、乾桔梗の六氏が世話人となり、島氏が世話人代表として同氏方に事務所を置き、七月廿九、卅の兩夜交正倶樂部に於てその第一聲をあげた。番組左の通り。

（初日）梅由（由兵衛、叶。小梅、平之助。長吉、千鳥。絃、龜造）沼津（宇都々、新造）先代（千鳥、龜造）妙心寺（吳光、新造）鮨屋（叶、龜造）堀川（與次郎、義昇。母、辰和加。お俊、桔梗お鶴、傳兵衛、うつぼ。絃、龜造、ッレ、新造）（二日目）白石（宮城野、小桔梗。信夫、春子。絃、龜造）儀作（共樂、新造）寺子屋（平之助、龜造）谷

邦(叶昇、新造)八陣(うつぼ、龜造)野崎(久作、桔梗。お光、叶。お染、うつぼ。久松、義昇。母、辰和加。下女吳光。絃、新造、ッレ、龜造)

## 乙女文樂人形入

# 中老會秋季大會

今春の大會に忠臣藏全通しを上演し非常な好評を博した中老會は九月十一十二の兩日午前九時半より淺草松屋ホールに於て乙女文樂人形入にて、軍人遺家族を招待して秋季大會を開催する事になつた。何分ホールの事とて時間が無く全員總出演といふわけに行かず殘念乍ら木下松玉、沼井盛鶴、坂本あるを、淺田奇聲の四氏が休演し、番組は左の通りである。

(初日)寺子屋(義昌、和孝)彌作(いろは、團市)紙治(越巴、和歌吉)太十(巽、絃平)未定(操、道之助)忠九前(昇、猿平)奥(桔梗、綱助)—(二日目)寺子屋(巽、絃平)近八(昇、猿平)鮨屋(義昌、綱助)布四(呑笑、絃平)陣屋(千晴、團市)沼津前(春和、絃平)同奥(茂里雄、猿平)

## 鶴澤觀西翁

# 文樂座に出勤

文樂座に出勤の噂があつて間もなく今春病床に就いた鶴澤觀西翁師は藥石効有つて恢復、日に增し元氣を取り戻しつゝあるが、盆替り興行よりいよいよ文樂座出勤が實現し、師は八月中旬より熱海に靜養後九月十日頃下阪する事になつた。

### 略歷

本名梅本和三郎、元治元年十月二日大阪市此花區上福島に生る。十一歳にして五代目鶴澤寛治に入門し小寛の名にて文樂座に入座。師が竹本重太夫を彈いて上京の際隨伴して口語り竹本光太夫を彈く、此時十五歳。十八歳の時鶴澤文吾と稱して地方巡業に出づ。寛治師亡き後六代目野澤吉彌の預り弟子となり野澤和三郎と稱す、此時廿歳。吉彌師亡き後は五代目野澤吉兵衛に師事し、竹本谷太夫後の染太夫(九代目)を彈く。廿六歳の時二代目竹本相生太夫の招聘に依り上京、此時野澤八兵衛と名乘る。それより相生太夫と共に下阪して文樂座に戻り相生太夫を彈き又六代目豊竹時太夫をも彈きしが、後に法善寺の津太夫を彈いて「堀川」と「引窓」

の二タ芝居を勤めし事あり。それより又々上京して鶴澤大造と名乗り相生太夫を彈きしも四五年にして斯界を隱退し實業界に入り、傍ら梅本香伯の素義名を以て三味線に親しむ。大正八年竹本若太夫の名の下に京都竹豐座に出勤後再び東京に戻り寛治師五十年忌を機として三味線を取り、七十五歳にして二代目鶴澤觀西翁を襲名せしが、今回五十餘年振りにて文樂座に出勤する事になたのである。

なほ昔は太夫の數を彈かぬと修業にならぬと言へ、それに太夫の意氣を知る爲めに隨分澤山の太夫を彈いたものである。前記略歷の外に初代源太夫、初代七五三太夫、先代津賀太夫、路太夫、二代目南部太夫、初代千駒太夫、東京に亡くなつた駒太夫等、等、思ひ出せぬ數にのぼつてゐるさうである。

竹本重子

# 二代目重之助を襲名

今回竹本重子師は師匠竹本重之助の名を受け繼ぎ二代目竹本重之助となりその披露大會を左記番組に依り九月三日午後四時半より日本橋倶樂部に於て華々しく開演する事になつた。

組打(重枝、駒榮)酒屋(素昇、猿玉)太十(彌周、三生)新口(越駒、津賀昇)先代(土佐廣、綱助)合邦(小津賀、紋教)—襲名口上— 鳴戸(染登、猿幸)十種香(二代目重之助、勝八、琴、勝之助)野崎(久作、住若。お光、綾之助。お染、若好。久松、小津賀。母、素昇。およし、彌周。絃、清一。ツレ、清二、清三、紋教、素女。胡弓、猿玉、土佐廣)

## 御挨拶

謹啓

酷暑の折柄皆様滿壽々々御機嫌麗しく居らせれ大慶至極に存じ上げます　申すも恐れ多き事ながら　大御稜威の下精鋭無比の皇軍のお蔭様にて私共藝界人が一途に藝道に精進致し得られます嬉しさ只有がたく感激の極みで御座います　扨て私事此の度恩師のお許しと並に御贔負皆々様のお勸めを頂き其之上先輩諸師の御激勵に依りまして嗚呼ケ間しくも師匠重之助の名跡を繼承致し當る九月三日濱町日本橋倶樂部に於きまして其の披露會を催させて頂く事となりました　何卒當日はお誘合され賑々敷く御來會を賜り何かと御指導御鞭撻の程幾重にも御願申上ます　敬具

重子改め

二代目　竹本重之助

四方の皆様益々御清祥に御過し遊ばされ御喜び申上ます　扨て此の度門弟重子事二代目重之助を襲名致させ別記の通り披露會を催す事となりました　是も偏へに御最負様の御引立と先輩諸師の御愛顧の賜と厚く御禮を中上ます

何分にも未熟者の事とて只皆様を力綱と頼みに致して居りまする次第何卒晴の門出を盛會に飾らせて頂き度當人共々伏して御願申上ます　敬白

昭和十七年八月吉日

初代
竹本重之助

竹本綱巴津

# 追善淨瑠璃大會

昭和五年六月卅日七十七の高齢を保ちて永眠した竹本綱巴津師の十三回忌追善淨瑠璃會が、三つの歳から師に引取られて大震災まで養育された豊竹宮太夫の上京を機に、七月廿五日正午から日本橋倶樂部で催された。綱巴津師は本名松村はつ、大阪で江戸の太夫竹本綱太夫に師事し、江戸へ戻る綱太夫に伴はれて出京、綱太夫亡き後豊竹巴太夫の門に入り、巴太夫又亡き後は現在の古靱太夫の師匠で、清六の養父法善寺の津太夫に師事し、三師匠の頭字を取つて綱巴津と名乗る。頗る元氣の人で、日本橋藥研堀に住み「藥研堀の師匠」で通つたものである。なほ素義笠松松蝶氏の義母にも當り、目下名古屋に出張中の松蝶氏は當日遙々上京し兜會を始め各方面より多數應援出演あり、兜會、日本義太夫因會、豊竹古靱太夫、鶴澤清六、竹本織太夫、竹澤團六、古靱太夫門弟一同、桐竹紋十郎、吉田小兵吉、桐竹龜三等より贈られた花輪生花に祭壇は埋るばかり頗る盛會を極めた。當日は古靱太夫の挨拶があつて、寶藏寺天昇、星野桔梗、笠松松蝶、豊竹宮太夫氏等の外文樂座太夫三味線多數列席した。

## 訃報

**大谷太郎君**　豊澤松造師三男太郎君は六月卅日急死、同君は甲種合格にて入營を樂しみ勇んでゐたもの、享年廿一。

**金杉雄子さん**　豊竹古靱太夫師愛娘雄子さんは永々病臥中の處、遂に七月廿四日死去。古靱太夫師は旦夕に迫る愛娘の死に心殘して東上、演舞場を廿八日間勤めたのであるが、古靱太夫師不在の爲め喪を秘して廿五日密葬し、本葬は改めて執行する事になつた

哀悼の意を表す　太棹社

## 本誌後援名譽會員

（イロハ順）

（東京之部）

廣瀬いろは氏　水戸部いづみ氏　木村一司氏　鈴木信昇氏　高瀬一泉氏　荒木一樂氏　關口以與子氏　吉川浪補氏　櫻井呂光氏　森内六花氏　阿部一月氏　橋本笑氏　菅田梅白春氏　中村和猿氏　西野巴洲氏　佐藤巴偶氏　北島北斗氏　宮内ほくろ氏　佐藤平之助氏　中澤どく巴氏　安藤登盛氏　吉田都山氏

山田十氏　岡崎都洲氏　安藤都竹氏　安藤都昇氏　平野都平氏　大熊都仙氏　國友東光氏　高橋富好氏　外山彌氏　堀とき氏　保々長平氏　緒方晴氏　栗原鶴氏　久米中千次氏　岸竹千史氏　松鳥氏　河史氏　神樂氏　林芳氏　金子昇氏　吉田松氏　本木熊氏　木大昇氏　鈴木龍氏　林和樂氏　青山和勢氏　飛石かなめ氏

小林太二氏　井田八巽氏　小森壽氏　大津昇氏　須賀佳子氏　用大嘉津氏　八木勝駒氏　岩崎がん昇氏　米澤樂氏　黑川雅叶氏　西田可松氏　高橋可遊氏　加藤兒氏

山本下彌生氏　石城冠之氏　中川華笑氏　水野吳羽氏　乃村乃昇氏　小鹽菊氏　島萩うつぼ潮氏　太田無氏　川口子太涯氏　井上素鳳氏　坂倉素遊氏　杉山橘氏　野根田本高團尾氏

影山氏　藤牧淺路氏　中川淡氏　柳有愛氏　及川築氏　大井蝶氏　淺野前氏　堂藏寺鐵氏　寶桑原永昇氏　岡崎圓樂氏　中田五氏　山崎向氏　中島古氏　保谷紅氏　田中廣司氏　湯淺光笑氏　田中玉氏　松岡月氏　河野語氏　原田越氏　安藤光巴氏　鈴木兒樂氏　安部富士雀氏　上杉文登氏　川田二盛氏　長谷川文樂氏　福久氏　篠岡糸氏　倉田中門氏　又山彌氏　田聲氏

坂本あるを氏　奥村三玉氏　寺岡三幸氏　木村さかえ氏　齋藤山生氏　平井榮氏　橋本三司氏　藤田三壽氏　細川清氏　金田鳳氏　錦松氏　淺田奇聲氏　星野桔梗氏　野島貴昇氏　岡本岡氏　歸山歸世氏　平井軌氏　橋本掬月氏　乾桔外氏　增田梗氏　增田喜城氏　田喜香氏　浦鏡鳳氏　和田金扇氏　澤部其角氏　荒木キクヱ氏　麻田喜らく氏　佐久間喜勇氏　吉川喜照氏　岩木義雀氏　良蟻若氏

山田義昇氏　三末游成史曲鳳昌氏　吉坂有玉氏　保村坂氏　西田操氏　岩瀨魚氏　高田美地句氏　吉井三由氏　横口みなと氏　野村三葵氏　北池田三芳國氏　村吉田三豆氏　須上美津氏　田美義氏　鈴木原松寶氏　小原松樂氏　伊藤松鶴氏　龜口田松花氏　三菊地月藤氏　地房秋蝶氏　花山紫瓢氏　田田壽氏　倉田口司氏　濱口田司重氏　打矢晋秋樂氏　西內昭華氏　永野神水氏　高瀨靜平氏　風氏

武笠宏亮氏　高品一重氏　平山平茶氏　福安瓢登氏　桑原美峰氏　池田美尙氏　魚崎福氏　松岡茂里雄氏　白井清華氏　近江清司氏　佐藤清聲氏　井岡關路鳳氏　的野生昇氏　富岡盛鶴氏　沼井靜史氏　時田靜昇氏　江原清華氏　三浦扇氏　德永翠松氏　仁木翠氏

米國杉山陶岳氏（地方之部）

同兼廣廣玉氏　同西本西紫氏　大阪氏家峰氏　神戸岡田鶴氏　大垣吉岡源氏　船橋川奈部銀司氏　下關保良鈴鳳氏　橫濱和田和朝氏

名譽會員

同鈴木香雀氏　同田中呑笑氏　同小林榮玉氏　同田島集樂氏　平塚國森鳴門氏　川口傍島紀鳳氏　八幡古賀大彌氏　靜岡加藤壽松氏　同森本梅魁氏　同山本笑正勇氏　同渡邊正勇氏　清水久保田聲保氏　同栗田錦昇氏　同柳原安樂氏　同西貝湊氏　濱松飯田自樂氏　同宮川はじめ氏　同佐藤和聲氏　同片橋國榮氏　東安岩崎山彥氏　北京關長門氏

佐久間喜勇氏　吉田龍昇氏　吉川喜照氏　山田都洲氏　岡崎都十氏　三口松藤氏　（新）　（新）　（新）　（新）　（新）

右の諸氏今回本誌後援名譽會員御賜り難有御禮申上候諸氏快諾を太棹社